

高等学校 英語

3年間を見通した高校英語の指導ストラテジーについて  
－発達段階に適した英語指導の内容・方法の提言－

高校教育課 指導主事 宍倉 慎次

要 旨

本県の英語教員の英語指導に関するアンケート調査の回答結果を分析し、そこから見いだされる課題を明らかにする。また、英語教育に関する各種文献等からの情報を収集し、その情報およびこれまでの経験をもとに「3年間を見通した高校英語の指導<sup>\*1</sup>ストラテジーについて」考察し、提言を行う。

キーワード：英語が使える日本人 コミュニケーション 言語活動  
大学入試センター試験 大学個別学力検査問題 ストラテジー

I 主題設定の理由

<sup>\*2</sup>『英語が使える日本人』のための育成の行動計画」は、平成19年度で終了したが、その趣旨は今後も生き続け、高校3年間の発達段階に応じた適切な英語指導が繰り返し広げられなければいけない。しかし、多くの進学校では、大学受験に必要な英語指導に重点を置いており、コミュニケーション能力の育成をするための時間を割かない状況が見られる。この状況を改善するために本主題を設定した。

<sup>\*1</sup> ストラテジー 目的達成のための計画や方法・手順

<sup>\*2</sup> 『英語が使える日本人』のための育成の行動計画」 文部科学省が平成15年3月に策定した行動計画で、国民全体に求められる英語の目標を「中学校・高等学校を卒業したら英語でコミュニケーションができる」としている。この行動計画は、平成19年度で終了した。

II 研究目標

本研究は、コミュニケーション能力を育成するためには、3年間を見通した指導ストラテジーが必要であること、各発達段階に応じた言語活動の導入が不可欠であること、また大学入試センター試験問題や大学個別学力検査問題も言語活動の材料になることを大学進学希望生徒が多い学校向けに提言する。

III 研究の実際とその考察

1 アンケート調査の回答結果

以下は、平成20年6月に英語指導に関して本県の県立の高等学校英語教員に実施したアンケート調査の回答結果である。(回答数 全日制63/68校中 定時制・通信制12/15校中 合計247名)

英語科の先生方の回答

1 入学後まもない時期に(回答数 245名)

- ①発音記号の指導を行っている。
- ②筆記体の読み方・書き方指導を行っている。
- ③辞書の引き方指導を行っている。

2 1年次において(回答数 244名)

- ④基本例文の暗唱指導を行っている。
- ⑤学習の習慣化をはかるべくできるだけ小テストを実施している。
- ⑥小テスト等で満足な成績でない生徒に対しては、追試験等の指導を行っている。
- ⑦考査や実力試験等で成績が振るわない生徒に対し、個別指導、追試験等の指導を行って

「はい」 の回答%	
①	50
②	9
③	78

④	49
⑤	86
⑥	69
⑦	74

いる。

- ⑧ 考査や実力試験等で成績が振るわない生徒に対し、事前指導を行っている。
- ⑨ 早い時期から接頭語・接尾語の指導を行っている。
- ⑩ 重要な語根（ルート）の意味をできるだけ教えている。
- ⑪ 中盤または後半から文法・語法教材を使用し、小テストを実施している。

⑧	6 1
⑨	3 1
⑩	4 9
⑪	5 5

3 通常の英文の読み方指導に関して（回答数 245名、⑫⑬は、重複回答がある。）

- ⑫ 訳読式である。
- ⑬ スラッシュリーディング（チャンク毎に前からの読みくだし）である。
- ⑭ パラフレイズやQ&A等で内容理解を行いできるだけ日本語を介さない。
- ⑮ できるだけ音読させる機会を設けている。
- ⑯ その他

⑫	7 3
⑬	6 0
⑭	1 5
⑮	9 3
⑯	9

4 コミュニケーションに関して（回答数 245名）

- ⑰ ペアワーク・グループワーク等のコミュニケーション活動をできるだけ導入している。
- ⑱ A L Tを活用し、聞く・話す機会をできるだけ設けている。
- ⑲ A L Tを活用しない場合でも聞く・話す機会をできるだけ設けている。

⑰	5 8
⑱	5 5
⑲	5 7

5 エッセイライティング（自由英作文）に関して（回答数 232名）

- ⑳ エッセイライティングの書き方をあらかじめ指導している。  
「はい」の場合 その時期は、1年次26% 2年次55% 3年次17% その他2%
- ㉑ エッセイの個人添削を実施している。  
「はい」の場合 その時期は、1年次15% 2年次38% 3年次31% その他7%
- ㉒ リーディング教材のテーマを使ってエッセイを書かせている。
- ㉓ エッセイはプレゼンテーションの機会を設け個人評価の一助としている。

⑳	2 1
---	-----

㉑	2 3
---	-----

㉒	1 4
---	-----

㉓	1 4
---	-----

6 年間計画に関して（回答数 242名）

- ㉔ 年度始めに当該学年の年間の使用教材のたまかな予定を計画している。
- ㉕ 1年次の年度始めに3年間を見通したたまかな使用教材の予定を含めた指導計画を立てている。

㉔	9 7
---	-----

㉕	3 7
---	-----

7 大学入試センター試験に関して（回答数 234名）

- ㉖ 大学入試センター試験演習（筆記）は、(1)1年以上前 (2)半年程度前 (3)約3か月前 (4)約2か月前 (5)約1か月前 (6)その他 から行っている。

項目の (%)	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)
	1 7	3 0	1 7	6	4	2 6

- ㉗ リスニング指導は、主に機材と市販の教材で行っている。
- ㉘ リスニング指導は、できるだけ教師自身の声で行っている。
- ㉙ 大学入試センター試験にリスニングテストが導入されたことで聞く力の養成に以前より力点を置くようになった。
- ㉚ 大学入試センター試験（リスニングテストを含む）の過去問を使ってコミュニケーション活動を行っている。
- ㉛ 大学入試センター試験（リスニングテストを含む）は「英語が使える日本人の育成」の一助となっている。

㉗	8 5
---	-----

㉘	1 6
---	-----

㉙	7 0
---	-----

㉚	1 8
---	-----

㉛	4 3
---	-----

8 大学個別学力検査に関して（回答数 233名）

- ㉜ 大学個別学力検査対策指導は、できるだけ志望大学毎のコースを設けて実施している。
- ㉝ 英文和訳を含め課題プリントの個人添削を実施している。  
「はい」の場合 その時期は、1年次 6% 2年次20% 3年次48% その他26%
- ㉞ 大学個別学力検査問題を使って、コミュニケーション活動を行っている。
- ㉟ 大学個別学力検査問題対策は「英語が使える日本人の育成」の一助となっている。

㉜	4 0
---	-----

㉝	4 9
---	-----

㉞	5
---	---

㉟	2 7
---	-----

9 授業評価に関して（回答数 241名）

- ㊱ 生徒による授業評価アンケートを少なくとも年1回は実施し、授業改善を目指している。
- ㊲ 上記アンケート結果は分析し、校内で公開している。

㊱	7 6
---	-----

㊲	3 3
---	-----

10 教員間の連携に関して（回答数 244名）

- ㊳ 指導内容・方法に関し、同僚とよく話し合い、共通認識をもって行っている。
- ㊴ 個人が作成した教材プリントを当該学年の他のスタッフと共有している。

㊳	7 8
---	-----

㊴	7 1
---	-----

11 「英語が使える日本人の育成」のために現在授業に求められているものは、何だと考えますか。  
具体的記述の主な例

(a) 文法、語彙等基本事項に関する記述

- ・英文法の基礎があつての「使える英語」なので、まず第一に授業で行われる英語を完全に理解すること。また、そのための科目を設置すること。
- ・文法・表現等の知識が使われる場面・状況と結び付き、さらに学習者が表わしたい内容と使える知識とがイメージとして結び付くような思考回路を導き出していく、統合性のある指導方法の構築。

(b) 雰囲気、環境作り等に関する記述

- ・少人数制で、AV機材を使用することもでき、授業で生徒一人一人に指導が行き届く指導。
- ・英語に対する拒否反応をなくし、誤りなどをあまり気にせず気楽に話せるような授業にすること。
- ・教授方法、教授内容以前に、クラスサイズ・授業頻度などの授業環境及び検定教科書の改善。

(c) A L T の活用や異文化および自国の文化理解等に関する記述

- ・全ての高校にA L T を配置し、異文化交流を活性化し、英語を使って通じる喜びを知ること。
- ・自国の文化・言語・自分自身に興味を持ち、理解しようとする。そして他国の文化や言語に興味を持ち、その違いも含めて理解しようと努力すること。
- ・英語をただ外国語として学習させるだけではなく、本来言語の持つ時代背景や文化などを取り入れた授業。身近なトピックを取り入れ、学習に取り組みやすい環境作り。
- ・A L T との連携を意識した教材作りをオーラルコミュニケーションの授業以外でも行うこと。

(d) 積極的な発信等に関する記述

- ・生徒にできるだけ英語を使わせ、英語に慣れさせること。自分の考えなどを自由に表現できるように、単語や連語をできるだけ多く覚えさせること。
- ・ペアワークやグループワーク等で生徒のコミュニケーション活動を増やし、発信する意欲と術とを身に付けさせること。
- ・生徒が自分自身の意見を持ち、物事を論理的に考え、小さな間違いを気にせず、積極的に発表できる力の育成。また、従来の講義形式の授業ではなく、生徒主体の授業。
- ・単なる決まりきった日常会話、レクリエーション的なゲーム、簡単なあいさつ表現ではなく、考えるべき話題や身近な出来事の内容を英語（読んだり、聞いたり）で提供することであり、またそれについての意見、感想等を自分の英語（書いたり、話したり）で表現させること。

(e) 教員の意識、授業姿勢、教材等に関する記述

- ・単語等を習得し、重要構文を理解した上で、英語をよく読み、書くという時間を増やすこと。
- ・教員の英語運用能力の向上、教員間での授業ストラテジーの情報交換・共有、目標（英語が使用できる人材育成）に対する教員の共通理解・意識高揚。
- ・授業の進め方を研究することと、アクティビティの開発。英語教員の意識改革。生徒に英語の必要性を理解させる授業。また、教師の英語力を向上させ、訳読式をやめて、英語で授業を行うこと。
- ・テキストを使ってコミュニケーションを図るための授業をし、生徒に考えさせ、英語で表現しようと思わせること。また、英語長文を読んで、要約させること。
- ・all English の授業にして試験問題から和訳を除くこと。教科書の日本語も文法説明など最小限に留めるなど、生徒が触れる英語の量を増やすこと。
- ・教員の自己評価、また生徒を含めた他による授業評価を行うこと。
- ・「使える英語」を体験できる時間をより授業に設定し、生徒が「英語を学ぶ」必要性を感じるような授業を心掛けようとする意志を各教師が持つこと。
- ・文法や訳読式の授業に偏らず、英語で表現できる場を設けること。まず、①（たとえ日本語でも）自分の意見を言えるようにする→②それを（単語の羅列でも良いので）英語で述べる→③（たとえつたない英語でも）相手の意見を理解する、と段階を踏んで生徒をステップアップさせる工夫。
- ・リーディングや英語 I ・ II で情報を整理しながら英文を読む指導の工夫、音読のバリエーションを増やし、英語の音になじませる指導の工夫。

(f) 自主的学習・動機付け等に関する記述

- ・各自が必要に応じた学習ができるようなスキル・ストラテジーを身に付けさせること。
- ・モチベーション。英語が本当に社会生活や日常生活の中で実際に役立つのだという体験や認識を持たせること。学校という擬似社会でその重要性、有用性、そして必要性を認識させること。

(g) その他

- ・生徒個人の動機、能力、目標等のレベルに応じた授業やコースが用意されていること。
- ・4技能を偏らずに指導すること。そして、その能力を高め、応用できるようにすること。
- ・日常生活で活用できる英語。英会話に限らず、カタカナ語や和製英語、また電子メールで使う表現など、生活で使える身近な英語をたくさんインプットすること。
- ・相手が伝えたいと思っていることを的確に把握する力と、自分が思っていることを相手に的確に伝えることができる力。「英語を使いたい」と生徒が感じ、自発的に英語学習に取り組むことができるような授業展開。
- ・受験を目標としない授業の設定および知識や教養が高められる教材の開発。
- ・中・高、あるいは小学校をも含めた、長期的な統一された英語教育の方針。
- ・音読を中心に、平易な英文を大量に読む活動。文字と音声为一体となったインプットを行い、その後習得した表現を用いてのアウトプット活動。また、適正なカリキュラムの編成と、教科書の厳選。
- ・ライティングの指導や和文英訳の際に複数の発想を瞬間的にできるようになること。自由英作文で必ずパラグラフライティングの基本に習熟させ、かつそれを他の生徒の前でプレゼンさせること。

英語科主任の回答

- 12 英語科の先生方の平均持ち時間（50分換算）をお知らせください。（回答数 全日制61校／68校中）  
13h未満→15校 13h～→13校 14h～→8校 15h～→11校 16h以上→14校
- 13 前期合格発表から入学式まで、「つなぎ教材」等を使って入学予定者に自学自習を行わ  
せている。（回答数 76校） 

13	9 5
----	-----
- 14 電子辞書は、許可している。（回答数 74校） 

14	7 7
----	-----
- その他 具体的記述例
- ・今年度1年生は禁止、2・3年生は許可。順次禁止する予定。
  - ・紙の辞書の使用を原則とし、特に1年次ではその指導を行っているが、2・3年次では電子辞書の使用は黙認している。
  - ・電子辞書を持っている生徒の方が多く、許可せざるをえない。その使い方について指導している。
  - ・電子辞書については一切触れず、入学時に全員共通の紙の辞書を購入させている。3年生になれば自主的に電子辞書を購入して使っている生徒もあり、その場合は容認している。
- 15 英語科として研究授業または公開授業を年1～2回実施している。（回答数 77校） 

15	4 8
----	-----
- 16 大学個別学力検査問題研究を教科会議でできるだけ実施している。（回答数 76校） 

16	5
----	---
- 17 英語の指導法に関する討論会を教科会議でできるだけ実施している。（回答数 74校） 

17	1 1
----	-----
- 18 学校設定科目を設置している。または、今後設置する予定である。（回答数 76校） 

18	2 5
----	-----

学校設定科目の具体例

科目名	内容	設置理由
生活英語 時事英語	オーラルコミュニケーション的な授業をベースに考えられる活動。	総合学科独自の選択科目として設置している。
実践英語	文章を読み、正確な情報や論旨を把握し、それを要約し、問題点等を指摘する力の育成。	2年間で学習した英語力を具体的な実践面で生かせる力を育成する。
英語一般	文法・異文化理解・時事問題など。	文法の集中講義、演習時間の確保、時事問題等のタイムリーな活用。
英語総合	基本的文法事項を中心とした復習。	復習を行うことで知識の整理や補充を行う。就職や進学への一助とする。
国際理解 比較文化	海外の文化を中心とした学習及び外国人講師による講義。	国際教養コースを対象。国際理解を深め、コミュニケーション能力の育成。
ライティング 基礎	それぞれのテーマに沿って考えや自分のことを英語で表現し、発表する。	3年次のライティングを履修するにあたって、文法の定着を目指している。
実用英語	文部科学省認定実用英語技能検定3級・準2級の問題演習。	資格取得を目指しながら、総合的な英語力の習得を目指すため。

## 2 アンケート調査結果から見いだされる課題

### (1) 1年次において

高校入学段階で発音記号の指導を実施している割合が50%と低く、将来的に未知の単語を辞書で調べて音声を習得していくという自学自習の習慣が身に付かない。筆記体についてその読み方・書き方指導が不十分であるために将来手書きの文書を読めない。基本例文の暗唱指導が不十分であるために英語力が発展的に習得されない。英語学習のストラテジーとして、接頭語・接尾語そして語根（ルート）の意味指導を行っている割合が50%を下回っており、生徒が語彙を増強していく上で大変苦勞し、その定着率や活用力が向上しない。

### (2) 通常の英文の読み方指導に関して

「英文を読む」とは、英文を日本語に直すことではなく、内容を心にイメージすることである。その意味で、英語の理解は英語で行われるべきであるが、そのような観点での読み方指導がなされていない。

### (3) コミュニケーションに関して

ペアワーク・グループワーク等でのコミュニケーション活動の導入が60%を下回っており、新しい知識をコミュニケーションの場で使用しないことで既習事項が定着しにくい。

### (4) エッセイライティング（自由英作文）に関して

英語で自己表現力を身に付けさせることが学習指導要領の大目標である。また、エッセイまでいかなくとも情報や感想をメールで伝えなければいけない状況は、今後多くなっていくと思われる。しかし、本県の高校教育においては、ほとんどエッセイライティングの指導まで到達していないのが現状であり、大きな課題である。

### (5) 年間計画に関して

3年間を見通した使用教材・指導計画を立てているという割合が40%に達しておらず、担当者が異動で転勤となった際、指導に一貫性が欠ける。

### (6) 大学入試センター試験に関して

センター試験には自然で実用的な英文が多数使用されている。問題演習だけではなく、その問題をコミュニケーションの教材として活用されていない。

### (7) 大学の個別学力検査に関して

それぞれの大学においてアカデミックな英文や特色ある問題が登場する。進学校においては、高校英語3年間の集大成として、それらを使ってコミュニケーションができる生徒を育てたいと考えている。それが「英語が使える日本人の育成」につながるはずだが、そのような観点で指導がなされていない。

### (8) 研究・研修等に関して

教科会議において、英語の指導法に関する討論会や大学個別学力検査問題研究はほとんど行われていない。この研究を個人レベルでの研究で終らせているとノウハウの共有と伝承がうまくなされない。

## 3 高校英語の指導についての各種文献等からの情報

(a) 平成20年1月17日に出された中央教育審議会の答申における「4技能の総合的な育成」について、新里は、「4技能の総合的な指導のためには、どのような工夫をすればよいのか」ということについて、次の7点を提案している。「①基本的に英語を使って授業を行う。②語彙、文型・文法の導入に関して、L→S→R→Wの順序を基本的に守るとともに、それぞれに費やす時間を意識的に確保する。③教科書本文の内容を扱う中で、4技能を意識する。④現実の言語使用をもとに、authenticな活動の連携を考える。⑤スピーチやディスカッション、ディベートなど、4技能の総合的な活用を前提とした活動を取り入れる。⑥プロジェクトワークなどを取り入れる。⑦4技能の総合的な活用そのものを評価活動として取り入れる。」（大修館書店 英語教育 4月号, 2008）

(b) 教員免許更新制度をうまく機能させるために中嶋は、必要不可欠な5つの項目を挙げている。その中で、学校現場の役割として、「学校は『組織で動くこと』『授業研究』を習慣にすることだ。10年も経てば教師の差は歴然としてくる。（中略）授業中心の『校内研修』を活性化させなければならない。」と述べている。（大修館書店 英語教育 11月号, 2008）

(c) 21世紀の英語教育の指針として、齋藤は、「生徒が情報や考えの送り手として『自分の考えや意見を持つこと』である。（中略）これを保証した外国語教育を我々日本人が創造しなくればならないと考えている。」と述べている。（齋藤栄二・鈴木寿一, 2000）

(d) 「コミュニケーション能力の育成を目指す授業」と「大学入試に対応する学力の養成」に関し、鈴木は、

1998年3月まで勤務していた大阪の進学校での実践から得たデータを用いて、実証的に検討した結果を次のように示している。『入試に対応できる学力を身につけるには音読は不要である』という考え方は誤りであると言えるであろう。あまり効果がない全文和訳をやめて難しい箇所だけに絞った部分和訳にして、浮いた時間を音読指導などのコミュニケーション能力養成のための基礎となる学習活動に回すほうが入試対策としても有効であろう。」また、『コミュニケーション能力を測定する問題が少ない現在の入試問題に対応できる学力を養成するには、コミュニケーション能力の養成を目指す指導を行なうより、いわゆる受験対策指導を行なうほうがよい。』という一般に信じられている考え方は誤りであると言えよう。」と述べている。(齋藤栄二・鈴木寿一, 2000)

(e) 「暗唱を重視した指導」に関し、竹中は、「日本人が置かれている言語環境では、できるだけ多くの短文を暗唱することが、英語の構文力を養い、さらに、スピーキングやライティングの力を伸ばすのに大いに有効である。」と述べている。(齋藤栄二・鈴木寿一, 2000)

(f) 英文の読み方指導に関して、田中らは、「英語の読解とは、英文を日本語に置き換える作業ではない。英語から意味を構成する行為が読解である。そして、読解力を鍛えるための方法が、チャンキングだといえる。チャンキング学習法を用いれば、線条に並ぶ英語の文字列を情報の単位(チャンク)に分けることで、意味のとらえ方が格段にやさしくなる。(中略) チャンキング図を利用しながら、reading comprehensionにおける6つのタスクを生徒に実行させることで、読解の授業から聞き、話すという統合的な授業への展開を容易に図ることができる。」と述べている。(田中茂範他, 2006)

#### 4 3年間を見通した高校英語の指導ストラテジーについての考察と提言

##### (1) 1年次において

###### ア 入学後まもない時期に

新入生を担当した際には、「高校の英語に期待すること」というテーマで生徒の英語学習について抱負を是非書かせたいものである。自分が担当していた生徒の抱負には、「英語を流暢に話せるようになって外国に多くの友達を作りたい。」「将来は、外国に留学したい。」等の記載が実に多かった。そのような生徒を前にすればコミュニケーション活動のない授業は考えられなくなる。しかしながら、何度かこの時期に、英語だけで授業を展開したことがある。しかし、生徒に挫折感を与え、高校の英語は難しいという固定観念を抱かせてしまうだけだった。したがって、担当者の「英語で授業をやろう。」という意気込みは生徒のリスニング力や語彙力を十分に把握した上で授業に反映するべきである。

###### イ 辞書指導

辞書指導は、中学校ではほとんど実施されていないのが実状であり、生徒に未知の単語を辞書で調べる意義をはじめに認識させることが重要である。すなわち、「辞書は、ある英単語の意味を知るだけでなく、その様々な用法を知ることができるとともにそれらの例文を活用できる。」という意義である。近年、電子辞書が普及し、当センターで英語の講座を受講する先生方もほとんど所有し、講義中に活用している光景を目にする。理由は簡単である。紙媒体のものに比べ、単語の意味検索が速いからである。しかし、電子辞書の使用に関して一部先生方から心配の声が生じる理由は、例文の所在が意味検索より深い階層にあることから、生徒が例文チェックまでいかず、意味検索で終了しているということ、また電子辞書にもよるが、その例文の絶対数が紙媒体のものに比べ少ないということ等が挙げられる。したがって、初期段階において、前述の内容を踏まえ、紙媒体の辞書と電子辞書、ともに長所、短所があることを認識させ、生徒が使用目的に応じて上手に使い分けられるように指導したいものである。

###### ウ 発音指導

読めない単語は覚えられない。したがって、発音記号から正しく発音できる訓練が是非必要である。また、最近では中学校において文字と音との規則性であるフォニックスを指導することが多い。発音記号とフォニックスを合わせて初期段階から継続的に指導するべきである。

###### エ 筆記体指導

海外から送られてきたクリスマスカードが筆記体で書いており、読めないので教えてください、という事例がかつて数回あった。筆記体は、英語圏では小学校4年生で学習する。確かに中学校の学習指導要領にはその指導に関しての記述はない。しかしながら、前述の例からも「筆記体は書けなくとも読める」という状態であるべきだ。筆記体で書くことに関しては、海外において英語での署名の機会もあり、自分の名前だけは筆記体で書けるようにしたいものである。指導の時期は、初期段階が望ましい。指導時間も1～2時間程度で済み、決して生徒の負担になるものではない。

## オ 基本例文の暗唱指導

高校英語で暗唱すべきとされる基本例文はおよそ600文ある。入学当初からそれらの例文の暗唱指導を行うことが必要である。高校に入学したばかりの生徒は、個人差もあるが、暗唱力が鍛えられていない場合が多い。したがって、この時期にそれを鍛え上げること、そして勉強の習慣付けを行うことが不可欠である。自分の場合は、週4回程度各10文の暗唱課題を与え、授業の冒頭で小テストを実施していた。小テストは、暗唱課題から任意の5文の日本語訳を口頭で提示し、英語で書かせ、1文4点満点で採点した。当然、暗唱不十分な生徒もいるが、そのような場合には必ず居残り指導を行った。

この指導を定着させるための効果的な方法として、小テストの前にペアワークで練習させること、または、クリスクロスゲームで学習状況のチェックを行うことである。ペアワークではペア替えを頻繁に行うことで生徒は生き生きと英語を話す。また、クリスクロスゲームでは、他の列の生徒の迷惑をかけないように必死で勉強してくる。こういう機会が生徒の学習意欲を高め、充実感や達成感を与える。この指導が1年次の半ばで終了できれば、語彙指導を本格的に始められる素地ができあがる。なお、このようなペアワークとクリスクロスによる生徒の学習活動は、1年次に限られるものではなく、英語の授業が続く限り実施されるべきである。

## カ 語彙指導

英語は語彙力と言われる。その語彙力を増強する際に接頭語・接尾語・語根（ルート）の指導がきわめて重要な指導事項の一つとなる。例えば、improvise という単語を指導する際に接頭語は im- = not, pro- = before, そして、語根は vis - = see であり、その全体の意味は「前もって見ておかない→準備しておかない」ということから、自動詞は「即興でやる、行き当たりばったりやる、アドリブ演奏する」という意味に、他動詞は「〔曲などを〕即興で作る、〔スピーチなどを〕即興でやる、〔席・食事などを〕間に合わせて作る」という意味になる。日本語の漢字の「へんやつくり、そしてかんむり等」にそれぞれ意味があり、それらの意味を小学校で教わるように、英語においても幼少の頃から接頭語・接尾語・語根（ルート）の意味を教わるのである。高校英語のレベルでは、「100の接頭語、118の接尾語、240の語根」（田代正雄、1984）の指導を充実させることで私たち日本人が未知の漢字の意味を類推できるように未知の英単語の意味を類推できるのである。また、語彙は productive（話せる・書ける）なもの receptive（聞いて・読んで理解できる）なものに分類される（I.S.P. Nation, 1990）。教師が、接頭語・接尾語・語根（ルート）の意味をよく知り、それぞれの語彙分類を熟知した上で、指導に生かす必要がある。このような語彙指導は、初期段階からの継続的指導が求められる。

進学校においては、使用教科書の他に、副教材として市販の単語集を使用し、語彙増強を図る場合が多い。その場合、前述の「オ 基本例文の暗唱指導」が終了し、生徒の暗唱力や学習習慣の確立の点で無理が生じない状態になっていることが望ましい。

### (2) 通常の英文の読み方指導に関して

英文を読むとは、英文を日本語にするということではなく、英文を日本語の介入なしにその内容をイメージできるようになることである。ここでは、そのような状態になる前の段階の指導に関する提言である。英文の意味内容を解釈する方法には、大別すると、いわゆる「文法訳読式」と、「チャンキング指導法（田中ら、2006）やフレーズリーディングやスラッシュリーディングと言われる方法」の二つある。後者は、「英文を Sense Group 毎に、その流れに沿って左から右へ逆行せずに意味をとりながら読みすすむ」方法である。初期段階として、チャンク（意味の塊）→日本語→チャンク→日本語、という意味把握の方法を教師が示してやり、徐々に生徒自身で意味把握ができるように指導する。この方法は、1年次前半の数か月で定着し、卒業まで継続する。過去25年間、この読み方指導を実施してきて、いわゆる「文法訳読式」に比べると、生徒の英文を読む正確性が高まり、スピードが速まるということが言える。もちろん、形式主語の It から始まる文や関係詞の扱い、自動詞・他動詞の区別、collocation（単語のつながり方）、無生物主語の文の扱い等は、リーディングストラテジーとしてその都度指導していかなければいけない。

この読み方を継続していくと、多くの場合、生徒の文法および語彙レベルに合致した英文を読む場合には、日本語の介入なしに意味内容を把握できるようになっていく。また、この読み方で英語的思考回路、すなわち、「英語で考える力」が養成され、英語を「聞く・話す・書く」という技能もよりスムーズに展開される。

### (3) コミュニケーションに関して

1999年度に当時の文部省主催の英語教員海外6か月研修に参加し、自分自身が英語の学習者として、「教師の解説→生徒のコミュニケーション活動→教師または生徒同士による評価」というサイクルが英語学習において最重要項目であると認識した。特に新たな文法知識や新出単語等の定着を図り、それらの活用力を身に付けるためにはこのサイクルは不可欠である。具体として、(1)の力で言及した productive (話せる・書ける) な語彙を実際のコミュニケーションの場面で使えるようになるためには、次のような学習指導の継続が効果的である。

- ①新出単語の発音ができ、接頭語・接尾語・語根を理解し、その単語の意味が分かる。
- ②辞書にある用例を読んで理解できる。
- ③辞書にある用例を参考にして、実際のコミュニケーション場面をいくつか想定し、その単語を使った英文を創作し、書くことができる。
- ④ペアワーク等で、③の英文をできるだけ原稿を見ないでパートナーに話し、お互いに応答を引き出しながら会話を発展させることができる。
- ⑤授業のたびに上記のペアワーク等の活動以外に、小テストやクリスクロスゲームを実施し、また、1か月に1回程度でよいのでスキットやダイアログもしくはモノログ等のプレゼンテーションを行って評価の対象とする。

この学習指導では、ALTとJTEによるモデルダイアログ等を生徒に提示することで、その効果はもっと大きくなる。また、この学習指導は、「英語が使える日本人の育成」の一助となると確信している。この学習を導入する時期もやはり高校の授業が本格的に始まったときが望ましいし、卒業するまで継続すべきである。

#### (4) エッセイライティング (自由英作文) に関して

生徒に英語での自己表現力を身につけさせる方法として、エッセイライティングは、大変有効である。エッセイのテーマにもよるが、中学生レベルの語彙力でも内容のあるものを書くことが可能である。したがってこの学習を導入する時期も、1年次の早い段階が望まれる。留意事項としては、あらかじめエッセイの構成パターンや既習構文を使った表現方法を指導しておくこと、また添削後の返却時に共通した間違いを全体へフィードバックすること等は不可欠である。人がものを書く際、読み手を意識して書く。したがって、提出させたものに「見ました。」のスタンプを押して返却するだけでは、生徒にとっても教師にとっても成長のきっかけにはならない。生徒の弱点を知り、指導の不十分な点を把握し、修正する上でも文法や語法そして綴りの間違い等を訂正し、内容に関してのコメントを書くことが望ましい。また、特別に支援が必要な生徒に対しては個別指導による「手だて」の絶好の機会にもなる。しかしながら、教師の労力は大変なものだ。かつて1年次から3クラスの生徒約120名を対象に年間12回ほど卒業するまでこの指導を継続したことがある。確かに大変なエネルギーと時間を費やしたが、文法力・文章構成力・語彙活用力が大変向上したという見返りがあった。ある程度文法力・語彙力がついてからこの指導をはじめるといふ考えもあるが、1年次の早い段階から卒業までこの指導をするということで生徒の英語による自己表現力は非常に高まる。特に、高校3年次の中盤からは、読んだ教材を基にエッセイを書き、それをペアやグループで相手に伝えたり、クラスで発表したりする活動は、発信力・コミュニケーション能力の向上にきわめて役に立つ。

#### (5) 年間計画に関して

年度始めに年間指導計画を立てるのは当然のことである。しかしながら、高校3年間を見通した計画を立てている先生方は多くない。PDCAのサイクルとして、指導計画は、高校3年間を見通したものであるべきだ。それは、常に使用している教科書・副教材の実施時期と生徒および担当者によるその教材評価、指導方法の振り返り、知識の定着度・活用度等を詳細に記載しておくことが必要であり、指導結果を総括した上で、新たな年度に向かうべきである。最大の留意事項は、入学から卒業までに教科書・副教材の知識を与えるという考えではなく、その知識を活用し、発信力を向上させ、コミュニケーション能力を育成するという目標でなければいけない。

#### (6) 大学入試センター試験に関して

この試験に使用される英文は、コミュニケーション活動のための有効な素材となりうる。例えば20年度入試において、次のような問題が出題された。

第2問 A ( ) に入れるのにもっとも適当なものを、下の①～④のうちから1つ選べ。

問1 The soccer game was shown on a big screen in front of ( ) audience.

- ① a large    ② a lot of    ③ many    ④ much

正解は、① a large である。多くの生徒は、audience は、「聴衆」という意味であるということは知っている。しかし、その用法についてあまりよく知らない現状がある。それを打破するためには、「(3) コミュニケーションに関して」で述べたような学習指導を展開し、それぞれの単語の意味だけではなく、その活用の仕方の定着を図るべきである。最終的には、次のようなコミュニケーションを展開できる生徒を育てたいものである。

生徒A : The other day I went to the movie theater.

生徒B : What did you see?

生徒A : Harry Potter!

生徒B : Great! How did you like it?

生徒A : Exciting. But a man next to me sometimes screamed so I couldn't concentrate on the movie.

You had better not go to the movies when there is a large audience.

生徒B : I agree with you.

このように audience という単語を実際にパートナーに使ってみることで、この単語は、70%以上の定着率となる (Tasker, Hipkins, Parker, Whatman, 1994.)。

## (7) 大学個別学力検査に関して

次の和文英訳の問題は、19年度入試において京都大学前期日程で出題された。

次の文を英訳しなさい。

教育とは何かと考えるときに、私が決まって思い出すのが小学校の恩師の顔である。先生は私たち生徒に、物事に真剣に取り組むことを教えてくださった。その教えは、これまでの私の人生の指針となっている。今から考えると、先生の教えが私の心に響いたのは、先生の尊敬できる誠実な人柄によるところが大きかったように思う。教育において考慮すべきことは、教える内容だけではなく、教える側の人間性でもあるのだ。

このような大学個別学力検査問題でもコミュニケーション活動のための絶好の素材となりうるし、そこまで発展させる学習指導が期待される。

この長さの日本語を英文にする場合、「(2) 通常の英文の読み方指導に関して」において「チャンキング指導法」について言及したが、第一にその作業とはちょうど逆の作業（逆チャンキング作業）が必要になる。

### ① 逆チャンキング作業

[例] 教育とは何かと考えるときに、／私が決まって（いつも）思い出す／小学校のある先生を。／彼は／教えてくれた／私たちに／物事に真剣に取り組むべきであるということ。／その教えは、／私の人生の指針となっている／これまでの。／今、言える／（大きな理由は、）つまり、先生の教えが私の心に響いた、／先生の誠実な尊敬できる人柄による。／考慮すべきことは／教育において、／教える内容だけではなく、／教師の人間性もだ。

② この作業を行った上で、生徒は、英文を書いてみる。

[例] When I think about what education is, I always remember my elementary school teacher. He taught us that we should face things seriously. That lesson has been my guideline in life ever since. Now I can say that the main reason why that lesson impressed me was because of his sincere and respectable character. Something, which should be taken into consideration in education, is that not only the teaching contents but also the personality of the teacher is significant.

③ 教師は、この英文をあらかじめ読み、添削し、生徒本人に返却しておく。

④ 授業において、生徒Aが①のスラッシュごとの日本語を生徒Bに伝える。生徒Bはそのスラッシュごとの英文をできるだけ原稿を見ないで話す。

⑤ 最後までいったら、その役割を交替する。

⑥ その次の段階として、生徒Aは、Please tell me the teacher you remember well. という発問をし、生徒Bから反応を引き出す。終了後、役割を交替する。留意点として、コミュニケーション活動のためのヒント（5 W 1 H）を板書したり、プリント等で用意しておく、よりスムーズに活動が行われる。

進学校の高校3年次であれば、「よく覚えている先生」というテーマで、その内容をパートナーに伝えることは難しくない。受験前の授業であるとしても、このような言語活動を導入することこそが、「英語が使える日本人の育成」につながると確信している。

## (8) 研究・研修等に関して

各先生方が、コミュニケーション能力の育成のための指導方法を研究することはもちろんだが、進学校

にあつては、それらをどのように大学入試センター試験や大学個別学力検査問題等に結び付けていくかという研究を行い、定期的に英語科会議等でその研究結果を報告し、意見交換を行い、授業改善に役立て、生徒の英語力向上を図ることが重要である。

#### (9) その他

今回のアンケート調査の中には紙幅の関係で「授業と評価問題」という項目を盛り込まなかったが、授業と評価問題は表裏一体である。したがって、コミュニケーション能力の育成という観点で評価問題を作成すべきである。

次の例は、hold one's tongue (黙っている) と run into ~ (～に偶然出くわす) というイディオムを使った評価問題例である。

[例] 評価の観点は、「表現の能力」、「理解の能力」および「知識・理解」である。

AさんとBさんの対話が成り立つように( )内に適語を入れなさい。また、[ ]内には、Aさんになったつもりで自由に英語を書きなさい。

(1) A: I wanted to tell her that she was wrong, but I held my ( ) .

B: You should have told her about it. Otherwise she will never improve herself.

A: [ ]

(2) A: If you ( ) into Tom, would you please tell him that I want to see him.

B: Sure. I am supposed to have lunch with Tom tomorrow. I will tell him about it.

A: [ ]

[解答例] (1) ( tongue ) If I had done such a thing, my relation with her would get worse.

(2) ( run ) Oh, really? Can I have lunch with you?

#### IV 研究のまとめ

コミュニケーション能力の育成のためには、前述した3年間を見通した指導ストラテジーや授業でのコミュニケーション活動が不可欠である。それらにより、既習事項から自己表現力を身に付け、発信力の向上を図ることが可能になる。大学入試で成功することだけを英語教育の目標にするのではなく、「大学入試で成功し、そして、英語が使える生徒の育成」を目標としたいものである。その実現は、教師の意識と授業力にかかっていると言える。

#### V 本研究における課題

高校の授業では圧倒的に「読む」ことが多いが、「読む」活動から「聞く」「話す」「書く」という総合的な英語力をつけるための具体的提言ができなかったことが課題として残った。

##### <引用文献>

- 田中茂範・佐藤芳明・阿部一, 2006 英語感覚が身につく実践的指導, 大修館書店 p. 222  
齋藤栄二・鈴木寿一, 2000 より良い英語授業を目指して, 大修館書店 p. 15, 24, 25, 27, 81  
大修館書店 2008 英語教育 4月号 p. 11  
大修館書店 2008 英語教育 11月号 p. 22

##### <参考文献>

- 文部科学省 2003 「英語が使える日本人」の育成のための行動計画  
文部科学省 1998 「中学校学習指導要領(平成15年12月一部改正)解説—外国語編—」  
文部省 2001 「高等学校学習指導要領(平成11年12月)解説—外国語編—」  
田代正雄 2005 「語源中心英単語辞典(改装版)」, 南雲堂  
旺文社 2006 2007年受験用 全国大学入試問題正解 英語(国立大編)  
旺文社 2007 2008年受験用 全国大学入試問題正解 英語(国立大編)  
I.S.P. Nation 1990 Teaching and Learning Vocabulary. Boston: Heinle & Heinle  
Tasker, G., Hipkins, R., Parker, P., Whatman, J. 1994 Taking Action: Life Skills in Health Education.  
Wellington: Learning Media